
戦夜の満月

現

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

戦夜の満月

【コード】

N3931C

【作者名】

現

【あらすじ】

月、というものに人は様々なものを夢見る。月の模様にも、様々なものを思う。これは、中国でいわれる『月の模様は蟹』というものを基に解釈を広げた話です。

時は戦国。尾張国。その中心に一つの巨城がある。白亜の城壁が夜に冴え、月下に凜と聳えたつ荘厳と呼べる姿だ。

その城の名を、清洲城といった。所在地は尾張国春日井郡清洲。主要な町を結ぶ京鎌倉往還と、伊勢神宮へ至る整備された伊勢街道が合流し、さらには五街道の一つである中山道にも連絡する清洲は、いわば交通の要所。重要な場所へ位置する土地である。

ゆえに清洲城の天守は、人の往来を見下ろし、見守り、見届けている。今宵、清洲城天守は、にわかに騒がしかった。

遠方まで眺望がきき、同様に遠方からも見望されるために、華麗な権力を象徴するかのごとく建つ城の最上、そこに、人の姿が数えて三つある。

一人は女、二人は男だ。

二人の内、一見して屈強な体躯を有する男。彼は、女へ話しかける。

「信長様、信長様。毛利新助に御座います」

「なあ新助、そう堅苦しいのはなしでいこうぜ。ここには俺らしかいねえんだから」

新助に名を呼ばれた女性、この城の現在の主である信長は、軽くそう答える。

長く落とすように伸ばした後ろ髪は、しかし後頭部で束ねられ、端麗の形容以上に引き締まった容姿と相俟って、どこか彼女を勇ましく表現している。

切れ長の、射抜くような信長の眼は微笑をつくっており、新助を注視している。

困り、新助は視線を下に逸らし、躊躇を得つつも意見を述べる。

「しかし信長様。……家臣たる私めが、城主にあらせらる信長様に気安い態度を取るのも憚られます」

「あのなあ新助。今は私らだけだ。誰もいねえんだから気にするな」
「いえしかし……」

「たくつ……相変わらず堅えな。おい、小平太。お前からも言ってみてやれ」

「了解つす姉御」

そう信長が命じた相手は、小柄で身の軽そうな男、服部小平太だ。小平太は新助と並び、信長の側近護衛、馬廻の役職を任せられている。

小平太は新助の肩を叩き、わざわざ彼の耳元で、信長にも聞こえるように諭す。

「新助さん。姉御の許可もあることだし、楽に行きましょうよ。人間、氣い張ってばかりだと疲れますよ？」

「馬鹿者。信長様の護衛である我々が、警戒を怠るわけにもいかぬだろう」

「新助さん。姉御は僕らより強いんすから大丈夫ですよ。大体、この場所じゃ危険も何もありません」

「そのような油断が信長様の死へ繋がってからは遅いだろうが。少しは考えろ、小平太」

叱咤された小平太は、呆れたようにため息を吐く。足を崩し、体の正面を信長に向け、だが横目で新助を見る彼は、

「しかし新助さん。言葉遣いと信長様への接し方は別物ですぜ？」
「それはそうだが……しかし」

新助は痛いところを突かれ狼狽える。その様子を笑って眺めていた信長は、やれやれと新助へ助け舟をだす。

「まあいいよ新助。お前の生真面目さは好きだからな」
「恐縮です」

新助が一礼を行う隣、小平太は足を崩し、体を腕で支えている。新助とは正反対に随分と楽な格好をとる小平太は、片腕で頬を搔いた。

「姉御。姉御から頼んどいて、姉御から先に妥協するのはどうなん

「ですかね」

「困っている男を見放すわけにはいかないだろう」

「なんか僕って悪役ですか！？ それにさっきの新助さんへの言葉も、聞き用によっては僕が嫌いってことですか？」

「その通りだが」

「断言したー！」

仰向けで、あくあとふてくされる小平太はそのままにしておき、信長は改めて新助へ目を向けた。

そして問う。

「ところで新助。小平太と二人して来たからには、何か用があるの
だろう。……報告か？」

はい、と新助は深く頷く。渋るように苦々しく、彼は告げた。

「今川の勢が、我が軍の城砦を陥落しているのはご報告しました。
そして二日前、今川軍は沓掛城へ入ったのを覚えてですか？」

ああ、と信長は首肯する。

「沓掛城……たしか、三河に最も近い城だったな。動きがあったん
だな」

「はい。現在今川軍は城を出て、松平元康率いる三河兵を先鋒に、
進軍を開始しております」

松平元康。後に徳川家康と呼ばれるその男のことを思い、信長は
ふんと吐き捨てる息をする。

信長にとつて、彼は気に入らない男だ。狡猾に物事を仕組み、勞
せずして利を得ようとする打算的な性格。

戦乱の世を生き抜く信長にとつて、元康のやり口は下劣でしか
なかった。

「あの狸め。今川が勝つと踏んだな。……状況はどうだ」

「今のところ、丸根、鷺津の両砦で抑えてはいますが……破られる
のは時間の問題でしょう」

「そうか」

眼を細めた信長は、盃を手を取った。しばらく彼女は酒を飲み、

ただ黙考をするばかりだ。

新助も小平太も、倅い、沈黙を保つのみである。と、信長はおもむろに立ち上がった。

「信長様、どちらへ」

「なに。夜風を少しばかり浴びたいだけさ」

信長は言い、杯を右手に握ったまま廊へ出る。天守の廊は高さゆえ、見通しは素晴らしい。横風に束ねた髪を踊らせる信長は、瞳の黒に、別の黒を映していた。

遠く、遠くまで伸びていく夜。もうじき端から夜明けが来るだろうが、恐らくは、それより早く今川の勢が攻めてくるだろう。

……戦の世、戦の夜か……。

柔い風を受ける信長は、冷たいものだ、と一言呟く。

彼女は欄干の縁に背を預け、天守の内部にいる新助と小平太の顔を認める。にやりと笑った信長は、そのまま首を上方へと傾けた。振り仰ぐ。

……ああ。

そこには、鮮やかな曲線を描く月があった。宵の清洲城は今、掲げるように満月を上空へ置いている。

月。古人はよく、あの輝きの満ち欠けを栄枯盛衰に例えている。

……盈虚は今宵、満ちにある。

そして思う。

……栄えるのはもはや今川でなく、私だ。

信長は満ちた月に、安堵に似た確信を得る。根拠などまったくない、独りよがりな確信を。

だがそれだけで、彼女は戦へ生きる覚悟を見出す。信長は月天を見据えたまま、なあと新助・小平太へ呼びかける。

「私の信長という名は、父上が戦乱を生き抜くには男であらねばならないと、そんな理由で、女だった私に与えた名だそうだ」

「そうですか」

「へえー」

戦の時代、力があるのは女ではなく男だ。だから、信長という男の名を、信長は持っている。

こうして後になって思えば有り難い話だが、と信長は内心に呟く。こうして男だと欺いていなければ、大名や将として軍を統べることは叶わなかったに違いない。

だから、その上で、正体を女と知った上で、変わらず自分へ仕えてくれる新助と小平太に信長は感謝していた。

視線を水平なものとし、信長は言葉を続ける。

「幼い頃、私は女の身で男であったからこそ、より粹にとらわれぬ行動をしようとはばかり考えていてな、いつか、『尾張の大うつけ』とも名付けられていた」

「しかし今は、ご立派な大名で御座います」

「ふーん。出世しましたね姉御」

誉め言葉に苦笑しつつ、信長は思い返すように続きを口にする。

「父が亡くなって九年が経つんだよな。だが実の話、父の死よりも、その後の、当時教育係だった平手政秀の死のほうが辛くてな」

「と、おっしゃいますと」

「政秀はな、私の奇行を諫めるために切腹して死んだんだと。政秀には私が女だということを伝えてなくてな、男らしくあるうとした私の行動が、結果、人を死なせてしまったよ」

風が吹く。信長はわずかに目を細めた。

「政秀が死に、四年前には、義父の道三まで戦で討たれてな。それも、嫡男に、だそうだ。私には随分と優しくしてくれてたんだがね」

「……………」

「……………」

力ない笑みを浮かべる信長には、戦の勇姿の面影は見受けられない。別人のような表情の信長は、酒を唇へと運ぶ。

「ところで、お前らにはあの月の模様は如何に見える」

信長に手招かれ、新助と小平太は廊に足を乗せる。酒を舌で転がす信長の隣、彼女を挟み込むように並んだ二人は、それぞれに夜空

の月を仰ぎ見る。

二人は見蕩れるように満月を注視する。それほどに、今夜の月は美しく、完璧を誇っていた。

さきに信長の質問に答えたのは、

「私めには、世の中に見えます」

新助だった。信長は理由を問う。

「なぜ、と訊こうか」

「月には輝く光の部位と、黒く染まった影の部位があります。煌めくように栄える者もあれば、陰で生きるような貧者もおります。これぞ今の世の様子かと」

告げ終えた新助は、それからしばらく、月から視線を離さなかった。

「小平太、お前はどうか」

「やっぱり兎っすね」

「普通だな」

「嫌な『普通』の使い方しますね姉御……。それじゃあ、姉御は何に見えるんですかい？」

「うん。私はね」

陰りをなぞるように視線を動かした信長は、確かめを打つように小さく頷いた。

「私には、蟹の姿にみえる。ぶくぶくに肥えた蟹だ」

信長は云う。

「戦が終わった後、近くの河川にいる蟹はな、大きく肥えた上等な蟹になるんだらと。……奴らは、人の屍肉を喰らっているのさ」
だから、

「あの満月に住む蟹はきつと、この戦乱の時代、幾千幾万の屍肉を喰ってきたんだらう。人がくだらない意志のなかで争い、互いに殺していくのを嘲笑いながら、今宵もまた待っているんだらうぜ。沢山の餌を」

「姉御……」

「信長様……」

そう語った信長は、ぐつと盃一杯の酒を飲み干した。口元を手の甲で拭い、信長は天守の内部へ戻っていく。

そして唐突に、舞いを踊った。

「幸若舞『敦盛』ですか」

新助と小平太が見つめる先で、信長は一心不乱に踊る。踊り続ける。

たんつ、と跳ねるように踏み込みを入れ、かと思えば繊細な腕手指の動きで場を魅了する。華麗に身を回す様は誰よりも凛々しく、洗練された拳動や捌きの一つ一つが、幾重にも幾重にも音を連ね、天守閣に在りつづける。闇空に在ってさえ世を照らす、月影のようにいつまでも。

幸若舞。信長の舞う様は、武士のように力強く華やかで、だがそれ以上に、言い知れぬ哀しみを無言のうちに謳っているようだった。幾分、幾時が経つたろうか。

舞いを終えた信長は、冷涼な空気で上気する身体を冷やしつつ、装備を整えはじめた。

戦へと動く。

「まずは熱田神宮へ参拝だ」

「熱田神宮……。確か、御神体は天叢雲剣でしたね」

「ああ」

熱田神宮。その神社が御神体として祀るのは、俗にいう三種の神器の一つ、天叢雲剣。

日本神話においては、ヤマトヒメが、蛮族を討ち払いにヤマトタケルが東へ向かう際、この天叢雲剣を渡したという。

信長は、ヤマトタケルに自分を重ね合わせていた。

「私も、天叢雲剣の神力にあやかろうじゃねえか。新助、今

川の兵力はどのくらいだ」

「二万から、……最大は四万ほどかと」

そうか、と信長は相槌を打つ。

出陣の用意を整えた。信長は、太刀を天井へと振り仰ぐ。そして、毅然とした態度で、声も高らかに彼女は叫んだ。

「聞け！ 私の夢は天下統一。あらゆる者を組み伏せて、世の隅々まで私は天辺から見守ってやる。愚かだ阿呆だと笑ってくれてもいい。だが私は確信をもって言うぜ。絶対に成し遂げるとな！ そして聞け！ その暁には、私はこの声をもって告げる。戦乱の時代の終わりをな！ 私一人ではなく、それこそ敵も味方もなく皆で、笑って生きれる世を作る。それこそが私の本当の夢だ！ 大言を述べるこのうつけに、ついてくる気はあるかお前ら！」

笑みで云う信長に、二人の笑みが返ってくる。負けじと声を張り。「当たり前つすよ姉御。夢幻を真にしましょう！」

「ならばこの戦、決して負けられませぬな信長様。今川の勢を壊走させてやりましょう！」

そして、新助、小平太は続けて誓う。

「僕らはずっと姉御と共にあります」

「いつでも。いかなる時も」

いい返事だ、と信長は笑った。満足の色を浮かべる瞳は、白みはじめる黒天を射抜いている。

陽が昇る前触れだ。夜が明け、新たな今日の始まりを鳴らす鐘として、明かりが空へと舞い上がりつつある。

信長は馬廻二人を従え、今日という日の戦地を想う。出陣だ。

「行くぞ。我らが血をもって、我らが子、そのまた子らへ譲るための、安寧の時代を築きに」

信長は、最後、天守閣を出る直前、止まらぬ笑みで照れくさそうに付け加えた。

「くくつ。ちいとばかり、格好付けすぎたかね」

(後書き)

信長って悪役多いよな〜と思い、それじゃあ格好よくさせてあげようというノリで書きました。女の設定ですけど。

あんまり歴史関係の話は書かないから不安で不安で大丈夫なんだろうがあ。

シリーズというわけではないですが、月の模様をベースにした短編を書きたいなあとかかなり漠然と考えてます。日本の兎、中国の蟹、ヨーロッパの女性の顔くらいしか知らないので、知識を分けてくれれば幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3931c/>

戦夜の満月

2009年3月24日10時15分発行